レーナ・マリア・クリングヴァル

1968 年 9 用 28 日、スウェーデン中南部の村ハーボに生まれる。出生時から両腕がなく、左脚が右脚の半分の長さしかないという原因不明の障害を負う。両親は自分たちの手で普通の子と同じように育てようと努め、彼女は小、中学校とも普通校に学んだ。

３歳から水泳教室に通い、18 歳の時スウェーデン代表として世界障害者水泳選手権 1 こ、また翌年にはパリで開催された欧州障害者水泳選手権に出場し数々のメダルを獲得した。さらに 1988 年には（レーナ 20 歳）ソウルパラリンピックに出場し好成績をおさめた。

音楽でも幼い頃より秀で、5 歳の時教会の聖歌隊に加わる。高校の音楽専攻科からストックホルム音楽大学現代音楽科に入学。1991 年大学卒業後、本格的に音楽活動を開始。まず全米 8 州約 50 カ所でコンサートを開催。日本では 1992 年に、まずキリスト教会を中心としたコンサートを始め、翌 1993 年より本格的にコンサートツアーを展開。以来、1997 年を除き日本では毎年コンサートが開かれ、キリスト教信仰こ基づいた彼女の明るく前向きな生き方と歌声は、多くの人々に生きる勇気と希望を与えている。

彼女のことはマスコミでも紹介され、世界的に注自を浴びる存在となった。スウェーデン国営テレビのドキュメンタリー番組「目標に向かって」が高視聴率を記録、欧州各国でも放映された。日本でもテレビ朝日「ニュースステーション」でこれまでに何度か彼女の歌声と生活が紹介され大きな反響を呼んでいる。

1995 年 7 月には大学時代の親友ビヨン・クリングヴァルと結婚。ハンディをものともせず、歌手として、主婦としてあらゆる可能性に挑み続けている。1998 年 3 月には、長野冬季パラリンピック開会式で熱唱。また、彼女の音楽活動を通し海外においてスウェーデンのイメージが向上したとして高く評価され、母国より「ポジティヴァ・スヴェリエ賞／栄誉賞が贈られた。

レーナ・マリア（ＬＥＮＡ　ＭＡＲＩＡ）　（１９６８年生まれ）
フット・ノート（足で書かれた物語）　小学館　1998.3.20 発行
p.162

「わたしが生まれる前に、あなたはわたしを見た」

「あなたが存在することに感謝します…けれど、もしあなたがごく普通のスウェーデン人だったら、きっと施設で車椅子の生活をしていたと思います。

あなたはなんて生きる喜びに満ちているのでしょう。あなたが何でもやってのけるのを見るのは素晴らしいことです。けれど、どうやってズボンをはいたり、服のあちこちについているボタンを掛けたりするのですか…助けを必要とはしませんか？」

日本やスウェーデンからたくさん手紙をもらう。向かい風を受けながら、どうしていつも人生を前向きで積極的に考えることができるのか、いろいろなことをやってのけることができるのかという質問を受ける。

これは難しい質問だ。けれど、わたしは三つの理由を挙げることができると思う。

まず最初に、ごく当たり前のことではあるけれど、人間はそれぞれが違った条件を持って生まれてくるということだ。わたしは生まれたときから明るく、人生に対して強い好奇

心を持っていた。わたしは困難さよりも、むしろ可能性に目を向ける性格だ。わたしはなにごとも必要以上に難しく考えない。わたし自身に対してポジティブな態度を取って、勇気を出し、わからないことは何でも質問することをいとわない。

わたしは頑固だ。ハンディキャップはわたしが良い意味で頑固に育つよう励ましてくれた。もしわたしが普通の身体であったなら、この頑固さと積極的にものを考える性格が、逆にわたしを自己中心的な人間にして、一生肩肘を張って生きていくことになっただろうと思う。けれど障害を持って生まれたおかげで、どんなことでも小さな努力の積み重ねによって成果が得られるのだということを学んだ。

もう一つの理由はわたしの両親だ。わたしとわたしのハンディキャップに対する両親のリラックスした態度は、言い尽くせないほどの大切な意味を持っていた。両親はわたしにとってかけがえのない安心感とよりどころで、成功や失敗を恐れない勇気を与えてくれた。しかも、わたしを励ましてくれたが、わたし以上にわたしのハンディキャップを重要視することは決してなかった。

もちろんわたしの肢体障害について、人々に説明しなければならないことはたびたびあったけれど、両親が問題にしたのはハンディキャップそのものというよりも、むしろ、わたしのおかれたそのときの状況であって、特にわたしのハンディキャップについてだけ話すことには関心を持っていなかった。

そして、わたしがいつも人生を明るく見ることができるいちばん大きな理由は、神を信じているからだと思う。わたしが覚えている限り、信仰はわたしの生活の大切な一部だったし、クリスチャンとして、自分がどんな人間でどんな姿をしていようと、人間としての価値があることを知っている。

わたしはときどき、詩篇の第二二九篇を考える。

あなたは、わたしの内鹿を造り
母の胎内にわたしを組み立ててくださった。

わたしはあなたに感謝をささげる。
わたしは恐ろしい力によって
　驚くべきものに造り上げられている。

　御業がどんなに驚くべきものか
　　わたしの魂はよく知っている。
　秘められたところでわたしは造られ
　深い地の底で織りなされた。
あなたには、わたしの骨も隠されてはいない。
胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。
わたしの日々はあなたの書にすべて記されている
まだその一日も造られないうちから。

（日本聖書協会出版の「聖書」新共同訳より）

わたしが胎児のときにも、神は傍らにいらしたのかしら？　わたしが生まれる前にわたしのことを考えてくださったのかしら？そう、わたしはそう思う。神にとって、わたしの姿や形は、いちばん大切なことではなかったのだと思う。いちばん大切なことは、わたしの神に対するかかわり方だ。わたしは神に好かれていることを知っている。

p.166

もちろんわたしも、地上にはなぜ多くの困難や苦しみ、病気やハンディキャップがあるのだろうと考えたことは何度もあるし、なぜ神はそうしたことをお許しになっているのだろうと疑問に思ったこともある。わたしには単純な答えは出せないけれど、きっとそういった痛みがわたしたち人間を築いていくうえで必要なのではないだろうか。光の明闇でレリーフが浮き彫りになるためには、光の届かない暗闇が必要なのではないだろうか。

…

人間はだれでも問題を抱えずに人生を送ることはできない。しかし人間としての豊かさは、困難な経験を通して獲得していくものなのだとわたしは思う。尊敬する人に会ったときに、わたしはそのことを感じる。人生の困難を克服する生き方が、彼らを尊敬に値せしめているからだ。

わたしがとても尊敬している人は、北海道に住む日本の女性作家・三浦綾子さんだ。
小さいときからいろいろな病気を患い、何度も生死の境をさまよったことがある。けれど、いつも困難をくぐり抜け、そのことが彼女に力を与えた。いまでは日本でも有数の作家で、クリスチャンでもある。彼女の創作活動はたくさんの人々に大きな意味をもたらしている。いままでに七十冊以上の本を出版し、販売数は三千万部以上、そのうちの何冊かは外国語にも訳されている。

いま彼女は年を取り、パーキンソン病や癌との闘病生活をしながら、作家活動を続けている。日本を訪問したときに一度三浦ご夫妻にお会いし、とても楽しく学ぶことの多い機会を得た。彼らの人生に対する勇気、喜び、温かさは、わたしに強い印象を残した。
こうした人々と比べると、わたしが特に難しい状況にあるとは考えられない。わたしが経験した痛みや苦しみも、それに打ちかつことができるように神が力を与えてくださったし、わたしに与えられた成功や失敗、喜びや苦労を伴うわたしの人生が、だれかに何らかの意味を持つのだとすれば幸いだと思う。

当然のこととして、神がわたしを障害のないからだにしてくれたらと願ったこともある。小さいときにはそんなことは考えたこともなかったが、いまではときどきそう願うことがある。身体が硬くなっていくのを感じるし、負担をかけると腰に痛みを感じやすくなってきたからだ。腕があればとも思う、いろんなことがしやすくなるだろうから。
そうなったらまさに奇跡だ！

(p.168)

けれど、現在のわたしの姿のままでも、神とともにおれることは、やはり一つの奇跡のように思える>アメリカの女性ジョニ・イーレッックソン・タダは潜水事故のために身体

が麻痺してしまった。しかし彼女はハンディキャップと信仰について「神がわたしを治癒してくださったら、きっととても幸せに感じるだろうと思う。けれど、わたしが困難な状況の中でも幸せに暮らすことができるということは、神がどれほど偉大であるかということを示してあまりある」と言っていたということを聞いたことがあるが、わたしもそう思う。

一部の人はわたしの信仰をナイーブだと思うかもしれないが、大小さまざまな状況のもとで神がわたしのところにいてくださるのを何度となく感じてきた。そして喜びとエネルギーを与えてくださった。だからこそ、これから何が起こるかわからないけれども、わたしは将来を明るく見続けることができるのだ。わたしは生き続け歌うこと、困難なときに助けてくれる夫や家族や友人がいることを、うれしく思っている。でも、いちばんの喜びは神が傍らにおられることだ。神はわたしを愛してくださり、何をもっても神の愛をわたしから取り上げることはできないことを、わたしは知っている。